
ルーツ

Lotus

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルーツ

【Nコード】
N6408D

【作者名】
Lotus

【あらすじ】
山陰の秘境を訪れる度に妄想は広がっていった。自らのルーツとその真実に興味を持ちながらも、抑えられない妄想を楽しんでしまう幼い私。フィクションなのかそうでないのか分からなくなってしまっ、エッセイ。

丹後と匹見（前書き）

以下の文章は私個人が子供の頃何となく考えてきた妄想であり、その内容を調査、吟味したものではありません。以下に書く内容に關してなんらかの知識を持つておられる方には「フン」と鼻であしらわれる可能性があることを私は認識致しております。「こんなだったら良いな。面白いな」という話。

丹後と匹見

私の住んでいる京都府京丹後市はその名にあるように「丹後」と呼ばれている。周辺には丹波、但馬などの地域がありその名の元となる由来には共通点があるように想像するのは容易だろう。

京丹後市はまだ新しい名前だ。市町村合併によって出来た新しい名前。京都府北部の丹後半島にある六町が合併して出来た。この新しい市の名前を決めるにあたって一般からの公募がなされたのだが、その中で割りと多くの応募があった名前に、「田庭市」というものがあつた。

田庭というのは丹波の元の名で、近畿北部の広い一帯を指していた。田庭から丹波となり丹後と分かれ……といった具合に変化して今の地方名があるという説。よくは知らないがこの辺りについてはネットで解説しているサイトが割りとあるようなので見てもらえば詳しく知る事が出来るだろう。

そして現在、「田庭の里」という名称はこの丹後をPRする中でしばしば用いられている。

所変わって島根県西部、中国山地の『中』に匹見町という町がある。現在、合併により益田市匹見町となっている。京都府京丹後市から随分離れている町だが、私はそこに縁があつて幼い頃から幾度も訪れている。ここで書くのは私の幼い頃の印象とふんだんに盛り込まれた妄想である事をもう一度言っておこう。

益田市は海に面しており、その中の匹見町は南部と呼ぶのか東部と呼ぶのかは知らないが、山側だ。益田市街から匹見町までは近年は道がかなり整備されているようで昔よりは速く行けるが、私の幼い頃の記憶（昭和50年代）では車で一時間半位はかかっていたのではないかと思う。

匹見町へ至るルートは幾つかあるが、どこを通っても初めて訪れ

る者にとっては『この先に街があるのか？』と思わせる様な細く曲がりくねった、左右に山が延々と連なつてそびえるその間の深い谷底を走る道。広島側から北上して至る道の中には、車の運転に自身の無い人は決して通つてはならないという様な峠もある。車が落ちたら、放置しか無いという……（よそ者の妄想であつて、実際はどうしているのかは分からない）。

そして匹見町に入り、役場のある中心部。私が持った一番古い記憶にある感想は、「まるで秘密基地」というものだった。私の生まれ育つた京丹後市は田舎で、どこを向いても山が見えているが、この匹見町は、「山」だった。どこを向いてもすぐ近くに山が迫っている。幼心にこれには感動した。我が家のある京丹後市の様な中途半端な田舎っぷりではない。いや、これは全く別なものだと感じた。ここは山奥のものすごい田舎とかそういう場所じゃない。人が生んだ里なのか、或いは神の箱庭か？ 島根県と言えば神話の国。神の箱庭という方が似合っている。

もし地元の方がこれを読んだら「大袈裟な」と笑うか、或いは怒られるかもしれないが、あの狭い景色を見るだけでワクワクした。狭いという言葉は私にとって悪い意味では無かった。子供の私にとってあの町は「凄い場所」。しかも程よく狭いあの谷間に凝縮された芸術作品の様な土地だった。

出雲国と大江山（１）

私が匹見町に行くのは殆どが夏休み、八月の連休だった。丁度その時期には祭りが行われる。役場前の広場には露天が並び、正面には舞台が設置される。そこで舞が行われるのだ。石見地方の神楽は石見神楽と呼ばれていて、ここでも幾つかの社中が舞を披露するらしいが、記憶を探ってみるとすぐに思い出されるのが『八岐大蛇』と『大江山』である。スサノオノミコトの大蛇退治、源頼光の鬼退治の二つ。どちらも有名な話で、こういった舞は全国各地で行われるものだろう。私は匹見に行く度にこの二つは必ず見たように思う。そして私はそれらを見ながらちよつとした妄想にワクワクしていたのだった。

この二つの話しか記憶に無いということは、幼い私は余程この組み合わせに魅了されたのだろう。出雲国と京都の大江山という二つ。『何故、遠く離れた匹見町で自分の地元の大江山が？』という驚きである。今考えれば前述のとおり全国何処でも取り上げられる有名な話なのだが……。

大江山という山は京都府の北部にある山で与謝野町や宮津市、福知山市にまたがって広がっている。京丹後市にある我が家のベランダからは一部ではあるがその稜線を望む事が出来、京都府北部の住人にとっては『地元の山』という感覚が強いだろう。

この山は余程、鬼好みの山の様で何度も鬼と呼ばれる何かが住み着き、三回鬼退治が行われたらしい。三回目が有名な酒呑童子の話だ。

ちなみにこの酒呑童子伝説の山は別の山だという説がある。京都市西京区にある大枝山おおえやまではないかというもので、都を度々襲ったという酒呑童子の住まいとしては市内に近くて都合が良い。北部の大江山に住んでいたら、夜、都を襲うとして手下が何十人（？）居たか知らないが数台のワゴンに乗り合わせて夕方出発、京都縦貫道を

南下して市内まで二時間切るかどうか……。都を襲う連中が交通法規を守る筈も無いのもっと速いかもしれない。金銀財宝さえ手に入れば帰りが遅くなるのも厭わないだろうし、自動車道の通行料も今のガソリン高も問題無いだろうが、当時は車も無い。大江山から都は遠すぎる。

そんな説もあるのだが、とりあえず一般の認識としては北部の大江山であるというのが通説なのではないだろうか。

この大江山と八岐大蛇という二つの話には、あまり一般には知られていないであろう繋がりがある。匹見町で同じ日に舞が披露されるなどという事ではなく、とても重要な、一説があるのだ。

出雲国と大江山（２）と近江

八岐大蛇の物語は酒吞童子と比べると少しばかり知名度が高いに違いない。

酒吞童子は何者か？

この謎の一説に、『八岐大蛇の子』というものがある。八岐大蛇は出雲の国でスサノオノミコトに退治される訳だがその後、出雲の国から近江に逃れ、そこで子を成したというのだ。その子供が酒吞童子なのである。

父である八岐大蛇はスサノオの酒の罠に掛かる程の酒好きで、息子は名前に『酒吞み』とまである。私にその説を信じさせるには充分だった。八岐大蛇は神話の時代だが、酒吞童子が都を荒らしたのは平安、鎌倉時代。父も子も人ではないのだから 息子はある人だったとも言われているが そんな時代のズレは人ではありえない寿命とかその辺りで想像豊かな幼い私は片付ける。先の『大江山は大枝山の事』という話も、根拠が圧倒的に北部の大江山より強固であるにも関わらず、私の地元である北部の大江山こそ物語に相応しい地であると考えた。

出雲と近江。この離れた地が結びつく。遠く離れた地が実は自分と縁深いものだったという発見（この時点では大江山という山が出雲と無関係ではなかったというだけで、ここには私個人は関係していないのだが）。この楽しい妄想を補強する説を手に入れ、私は物語の中を進んでいく。

次の出雲と近江の関係は歴史に詳しい、特に室町、戦国あたり人なら知っている話かも知れない。いや、私より知っている人が多い筈で、ここでもまた『これは私の妄想です。しかも専門家でも何でもない素人です』と言い訳しておかねばならないだろう。

中国地方の戦国武将と言えば誰を思い浮かべるだろうか？ 何人が挙げる事が出来ると思うが、まず最初に挙げるであろう名は『毛利』、『尼子』のいずれかではないだろうか？

この両氏はどちらも中国地方を制覇した事がある。それこそ詳しくは無いので言える事は少ないが、尼子氏が最初に勢力を広げ、その後には毛利が力を付けて尼子を滅ぼしたという。

この尼子氏の『尼子』という名は近江の地名である、と私は聞いた。今の滋賀県に『尼子郷』という場所があったらしい。中国地方で特に知名度の高い尼子氏は、近江の出であったのだ。尼子氏の源流は近江源氏と呼ばれる佐佐木氏。歴史の時間に習ったような習っていないような南北朝時代の婆娑羅大名、佐々木道誉（高氏）の孫が『尼子』を名乗った最初の人だった。

丹後の京極氏

尼子氏の話を持ち出してこの丹後地方と出雲地方を結びつけるというのは特別な事でも何でもない。最初から繋がっているからだ。戦国の名立たる大名は殆どが鎌倉、室町時代にはすでに実力者の家系であつて、勢力範囲も大きい上に更なる家系を生み出していく。本家があればその周りに分家、そのまたまわりに分家の分家といった具合に広範囲に広がっていく。尼子氏で言えば近江源氏佐木氏の一族である京極氏は若狭や丹後の国主であり、出雲の守護でもあった。尼子を名乗った佐佐木高久の子が出雲の守護代になって、さらにその孫、尼子経久が戦国大名となる。

これらの事は今の時代になり、調べれば専門家でなくてもすぐに知る事が出来るのだが、そこまで詳しく知らない私は益々勝手な妄想を募らせる。京極という名は子供の私も聞き及んでいた。うちのご近所である宮津市と今は京丹後市となっている峰山町は、宮津藩、峰山藩と呼ばれて城跡も残っているからだ。どちらも京極氏が治めていた。ちなみに宮津市は日本三景の一つ、あまのはしだて天橋立がある街だ。写真を見れば思い出す人も多いと思うが、実際は地元の間人がガツカリするほど知名度が芳しくない。宮島、松島、そして天橋立といつも三番目にくるのも納得がいかない。『一番不思議だろ！あの地形！』などいつも思ってしまう。本当に余談であつたが……。

テレビ等で時代物といえば大抵、戦国か江戸時代が舞台だ。『他の時代はそんなに面白くないのか？』と突っ込みたくもなるが、おそらくそうではなくて戦国時代が他よりずば抜けて面白いという事だろう。織田信長や豊臣秀吉、徳川家康にその他の大大名はとにかく人気の高いキャラクターで、その部下達も知名度は抜群だ。そんな中に京極氏もある。

『なんかかつこいい』姓、京極。京都の『京』があつて、それでいて北部の若狭や丹後の国主でもある。説明するのは難しいが、例え

ればもの凄いビッグスター（？）が別荘を近所に作って頻繁にやって来て、『ここは最高だ！』と言う。お隣さんの私は鼻高々だといった具合だ。なんとかニュアンスにバリエーションを持たせて想像してもらえるとありがたい。

ただの田舎じゃない。この辺はそうじゃないんだ、という田舎者の私の幼い自尊心。『おかしいだろ』という突込みが聞こえてくるようだが、おかしいので今書いている、とも言える。可笑しく、楽しい妄想なのである。

私の先祖が大昔からこの京丹後市で生活していたのならば、京極家の治めるここの領民だっただろう。京極のお殿様とか呼んでいたかも知れない。ここからまた不思議が子供の私の中に生まれて来るのだ。

私の家系は少なくとも江戸後期まではこの丹後には居なかった。

我が家の先祖は中国地方の西部に居たのだ。私の父方の祖母は、『尼子』姓である。

尼子自慢

『父方の祖母』

この微妙な距離感が良かった。私自身は尼子姓ではない。今現在、尼子を名乗っている家で『戦国大名の尼子氏とは全く縁もゆかりもございません』という人が果たして居るのかどうかは定かではないのだが、私が尼子姓だったなら恐らく『うちは戦国大名の、いや、近江源氏の、いや、宇多天皇の子孫で……』なんて自慢をしていたに違いない。残念ながらそうではないのでこれは無かった。そして、そう自慢できる『尼子さん』は周囲にも居なかった。

遠い親戚ではない、祖母の旧姓が尼子だったというのは、その『尼子さん』に次ぐ地位であり、私の妄想内ランクづけだが、幼い私の密かな自慢でもあった。

祖母は、匹見町に住んでいた。島根県西部という場所ならなんら不思議は無いと思われるが、尼子姓は中国地方なら溢れているという訳でもない。ただ分布としては比較的多いのかも知れない。祖母の実家については私も幾つか聞いて記憶に残っているものがある。祖母は明治生まれの人だが、やはりその尼子の家は当時まで武家であつた様に思われる。これまた詳しく調査などしていないのだが私は話を聞いてそう決めた。鎧兜に刀等があつて、今で言うお手伝いさんの様な人も何人か居たらしく、一般的な家とは少々異なっていたらしいからだ。武家と言つても上級、下級などというランク付けがあつた訳で、下級も下級、極貧の武家であつた可能性もあるのだが、とりあえず百姓では無かつたんだな、と、とりあえずこの事は私を喜ばせた。

私に家柄、あるいは職業差別の意識がほんの僅かでもあつたという事は今となつては恥じ入るばかりだが、言い訳というかその罪な意識に情状酌量を求めたい。確かに祖母は尼子の家の出であつたが、その祖母が嫁に行った先、つまり我が『家』はそういう家柄では無

く、百姓であつたらしい。つまり、自慢出来る要素が見当たらない。したがって、私の自慢は『おばあちゃんはかつてこうだった（らしい）』というものになる。それを聞く小学校、中学校時代の友達などは『ふ〜ん』と言つしか無かつただろう。徳川だ！ 織田だ！と言つならまだしも、尼子だ！では知名度が子供達の間では低すぎる。先祖を馬鹿にするな！ というお叱りを受けるかも知れないが、何も知らない子供が尼子という名で連想するのは『尼さん』くらいのもので、私も最初口にするのが憚られた程である。中国地方の子供はどうだったのだろうか？ 私の住む京都府よりも尼子の名は身近なものだろうか？ それならその名を堂々と口に出来ただろう。ただ、身近過ぎれば自慢にならない。それ以前に私よりランクが上の『尼子さん』本人が近くに居る可能性が高い。

ここまで『尼子』という姓について書いてきたが、これともう一つ、私の注目している姓がある。それは私がこの丹後と匹見町のある中国地方を関連付けるときつかけとなった姓。丹波の古の名、『田庭』である。

田庭の里と田庭姓

田舎は特に多いと思うが、『この集落は殆どが　さん』という所がある。私の住む街にもそういう集落が幾つもある。時代を経るにつれてその『　さん率』は低くなってくるようではあるが……。

このような『この集落は殆どが　さん』の『　さん』の姓はどのようにしてそうなるのか？　これには無数のパターンがありそうだが、地元の地名や俗称から来るものは無いだろうか。鈴木や佐藤といった圧倒的多数を占める名は地名とは関係無さそうだが、少々珍しい名前になら地名に関係するものも在りそうではある。

丹波という人は結構多いと思う。地名を意識せずにそう名乗り始めたという人は居ただろうか？　社会的に地位の高かった者以外の庶民が姓を名乗る事を許された時、何を考えて自分の姓としたのか住んでいる土地の地形もあつたろうし、それとは関係なくその人の趣味趣向であつたかも知れない。

丹波という場所があると知らずにこれを名乗った人はかなり少ないのでは無いだろうか。ここで言っているのはもしこれを読んでいるあなたが丹波さんであつたなら、あなたの家、丹波家の祖先、最初の『丹波さん』の話である。あなた自身が丹波という場所を知らなかったとしてもそれは関係がない。

冒頭に書いたとおり、丹波、丹後地方は古代に『田庭』と呼ばれていたらしい。この字面、何ともシンプルで『田』、『庭』という非常に身近なものの組み合わせだ。『庭なんて無い！』という方も大勢居るだろうが、とりあえず見かける事はよくある。ちなみに我が家にも『庭』は無い。

この『田庭』を自分の姓にした人はどれだけいるのだろうか？

私の身の回り、京丹後市に昔　少なくとも大正以前　から住んでいる人で『田庭さん』は、かなりの確率で、居ない。昭和になつてこちらに移り住んできたという田庭さんはある。しかしそれ以

外はまず聞いた事が無い。街のPRに登場する事もある古の名、『田庭』と同じ姓を持つならきつとこの土地の人の中の記憶に残りやすい筈だが、さっぱり聞かない。田庭を名乗ろうと思った人は皆無だったのか？ 新市名の公募に『田庭市』が上位にくる程であるというのに……？

『田庭』と呼ばれたという地域は京丹後市だけではなく他の京都府北部地域や兵庫県の中部北部もその範囲に含まれていた様なので、そちらには『田庭さん』が居るかもしれない。地名由来の、という話であり全国的にはある名前だとは認識している。このシンプルな字面にしては極めて少ないと言えそうだが。

さて、また私は島根県西部の町と丹後を繋げる作業を続ける訳だが、私が赤ん坊の頃から訪れる島根県の益田市には『田庭家』が昔も今もある。そして匹見町にも、ある。

京丹後市には無い。我が家の先祖が古くから居たこの島根県西部にはある。しかも割とあるらしい。これがとても不思議な事のように、幼い私には思えたのである（そんな事ばかり考える変な子供だが）。

ルーツ 最終回

「田庭さんは他にもあるよ」と私が匹見町を訪れた際に聞いた事がある。匹見町にもあり、益田市（旧益田市地域）にはもう少し多くあるらしい。山口県にもある筈だ、と聞いた。

『田庭』は特殊な名前でもなんでもない。少なくとも島根県西部、山口県辺りでは。その由来については不明だが、近畿中北部の様な古代の丹波地方を田庭と呼んだというそういった類の謂れについては聞かれなかった（調査もしていないが）。

地域の繋がりは道によって成る。都を中心として西へは山陽道、日本海側なら山陰道。地域の繋がりは人の繋がりの事だと思うが、確実に京丹後市も山陰を通して山口県下関、そしてその先の九州に繋がる。

山陰道の両端それぞれに近い場所にある『田庭』と『田庭』に何か繋がりがあって欲しいという願望が私の中に数十年在り続けている。何も無い可能性の方が圧倒的に高いと予測してはいるのだが、どうも拭えない。願望が妄想となつて、今ここで書いているような事を考え続けている。

今はどうか知らないが、『家系図を作る』というのが流行るとまではないが世間で話題になった事があつた様に思う。我が家の自分のルーツを知りたいというのは誰しも思う事だろう。何処から来たのか？ いつから 姓を名乗つたのか？ 血の繋がりは何処まで広がっているのか？ こういった事を知りたくなる気持ちは生きたら生きるほど強まっていくものらしい。

私の場合は興味を持ったのが幼い頃で調べる方法も知らなかったし、いつしか勝手に想像して物語を作るという妙な方向へ行ってしまった。周りに手掛かりらしく思えるものが何も無かつたならきつとこの様な妄想は生まれなかつただろう。しかしながら私の周りに

はあつた。今思えば多分何でも無い、京都の酒吞童子の物語を遠く離れた父の実家のある山陰の秘境匹見町で観たり、祖母の実家である尼子氏の源流と京の都、そして最も面白い妄想となった、島根県匹見町とその周辺の姓『田庭』と丹波地方の古代の呼び名『田庭』。『田庭』について簡単にまとめると、古代丹波地方は田庭と呼ばれたが現在田庭姓は殆ど無いと思われる。一方、中国地方には田庭姓がある。丹波の『田庭』は古事記に出てくるような古代の呼び名であるから最初に現れたのはこの丹波。中国地方の田庭姓が何か関連性を持つとすれば現在は見当たらない丹波の田庭氏が西方へ移動して　という、これが私の楽しい仮説である。

「うちは最初から中国地方の人間だ！　丹波なんていう所から来た流れ者じゃない！」

と、憤慨される田庭家の方が居られるかも知れないが、どうかご容赦願いたい。そう思いたい気持ちには非常によく分かる。だが、私はそれでもこの仮説を捨て去る事が出来ない。なぜならば私のこの物語には続きがあるのだ。

遙か古代、田庭の里で生まれて後、西に移った田庭氏。長い年月を経てその『田庭』の一人が再び東へと戻った。かつての『田庭の里』へ。しかしそこに田庭氏を名乗る者は既に無く、伝承が僅かに残っているだけであつた。

妄想なのだからもう少し楽しい結末の方が良さそうなものだが、この最後の部分だけは少しばかり事実が含まれている。それが幼い私を妄想に駆り立てる理由だ。

田庭の里に偶然やってきた『田庭』。私の妄想仮説でいうならば、山陰の秘境の町から田庭姓の途絶えた田庭の里へ遙か時を越えて東還を果たした田庭氏の一人、それは私の父である。

ルーツ 最終回（後書き）

くどいようですが、この文章は私個人が子供の頃何となく考えてきた妄想であり、その内容を調査、吟味したものではありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6408d/>

ルーツ

2010年10月8日15時52分発行